

1 古文基礎

1 仮名遣い

次の言葉を現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書きなさい。

(1) いにしへ 〈千葉〉

(2) いづこ 〈山口〉

(5) たぐひなく 〈長野〉

(6) きはめたる 〈大阪A〉

(7) つひやし 〈千葉〉

(10) おほかた 〈青森〉

(11) ふかるるやうに 〈埼玉〉

(12) ゐて 〈広島〉

(13) ゆゑ 〈佐賀〉

(14) かうむり 〈石川〉

(15) かやう 〈岐阜〉

(17) なほさうざうしけれ 〈三重〉

(19) 交はり 〈山梨〉

※著作権の都合で一部の問題の掲載を差し控えております。
実際の教材には掲載されておりますのでご安心ください。

2

仮名遣い

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

〈東京〉

この頃の花こそ初心と申す頃なるを、極めたるやうに主の思ひて、はや申樂もろがくにそばみたる輪説をし、至りたる風体をする事、あさましき事なり。たとひ、人も褒め、名人などに勝つとも、これは一旦めづらしき花なりと思ひ悟りて、いよいよ物まねをも直すにし定め、名を得たらん人に事を細かに問ひて、稽古きこをいや増しにすべし。

(注) 申樂…日本の古い芸能の一種。

(「風姿花伝」による)

5

3

仮名遣い・作品の種類

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

〈滋賀〉

思ひつつ 寝ればや人の 見えつらむ 夢と知りせば 覚めざらましを

(1) 「思ひつつ」を現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書きなさい。

(2) この作品の種類として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 俳句 イ 漢詩
ウ 和歌 エ 随筆

4

著作権の都合で掲載を差し控えております。
実際の教材には掲載されておりますのでご安心ください。

5

著作権の都合で掲載を差し控えております。
実際の教材には掲載されておりますのでご安心ください。

著作権の都合で掲載を差し控えております。
実際の教材には掲載されておりますのでご安心ください。

係り結び
次は、「徒然草」の冒頭の部分です。これを読んで、あとの問いに答えなさい。
〔京都〕

つれづれなるままに、日暮らし、硯すずりに向かひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

〔徒然草〕による

「ものぐるほしけれ」のように、「係り結び」によって結びの部分が変化している文として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。

イ あるとき思ひたちて、ただ一人、徒歩かちより詣まうでけり。

ウ 月のころはさらなり、闇もなほ、螢の多く飛びちがひたる。

エ 春風に一もみ二もみまれて、海へさつとぞ散つたりける。

主語把握
次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。
〔長崎〕

ある在家人ざいけにん、山寺の僧を信じて、世間・出世しゅっしよ深くたのみて、病やまひむ事もあ

れば薬までも問ひけり。

薬についても尋ねた

〔注〕在家人：僧にならず一般の生活を営みながら、仏教を信仰している人。

世間・出世：日常生活に関わること・仏教に関わること。

〔沙石集〕による

「薬までも問ひけり」の主語を書き抜きなさい。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

〈和歌山〉

月日は百代の過客^①にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口^②とらへて老いを迎ふる者は、日々旅にして、旅をすみかとす。古人も多く旅に死せるあり。

〔おくのほそ道〕による

(1) 「過客^①」と同じ意味の語を、本文中から書き抜きなさい。

(2) 「とらへて」を現代仮名遣いに直して書きなさい。

(3) 「古人も多く旅に死せるあり」の内容として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 昔の人の中にも、旅の途中で亡くなった人が多い。
 イ 亡くなった人の多くも、死ぬ前に旅を思い出した。
 ウ 年老いた人も、旅を夢見て亡くなることが多い。
 エ 旧友の多くも、旅する前に亡くなってしまった。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

〈静岡〉

粗忽^{そこつ}なる若衆、餅をまゐるとて、物敷を心がけ、あまりふためひて、喉^{のど}そつつかしい若者が 召し上がる ひとつても多く あわてて

に詰まる。人々せうしがりて、薬をまゐらせても、この餅通らず。

気の毒に思い 差し上げて

何かといふうちに、天下一のまじなひ手^{マシナヒテ}を呼びければ、やがてまじなふ^{マシナフ}そうこうしているうちに

すぐに折って

て、そのまま、ちりげもとを、一つ叩き^{エたた}ければ、りうごのごとくなる餅、真ん中がくひれた形をした

三間あまり先へ、飛んで出る。

（きのふはけふの物語）による

（注）まじなひ手……ここでは、神仏などの力を借りて病氣などを取り除く者。

ちりげもと……ここでは、背中側の首のつけ根のあたり。

三間：約五・四メートル。

(1) 「まゐる」を現代仮名遣いに直して書きなさい。

(2) 「詰まる」「呼びけれ」「まじなふ」「叩き」から、その主語に当たるものが同じであるものを二つ選び、記号で答えなさい。